【郷土史への扉】

邪馬台国と熊襲国

平成二十一年十一月十一日付けの南日本新聞に、"卑弥呼の宮殿か"という大見出しの記事が掲載されました。

「邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纒向遺跡で、三世紀前半としては国内最大の建物跡が見つかり、市教育委員会が十日、発表した。女王卑弥呼（生年不詳～二四八年ごろ）の時代と重なり、邪馬台国畿内説の専門家は『卑弥呼の宮殿ではないか』と指摘」

ところで「邪馬台国」が、なぜそれほどまでに人々の注目を集めるのでしょう。それは「邪馬台国」が後の大和政権の母体とされ、日本の国の起源に大きく関わっていると考えられるからなのです。

中国の書物『魏志倭人伝』に、「邪馬台国には卑弥呼という女王がいた」「景初二年、魏の国王は、親魏倭王と彫った金印をさずけ、銅鏡百枚などの贈り物と共に卑弥呼に贈った」といった記事が見えます。

景初二年は、西暦二三八年、日本の年代でいえば、弥生時代に当たります。

『倭人伝』は、女王卑弥呼の邪馬台国のほかに、邪馬台国に属する国を二十一挙げ、その南に「狗奴国」という国がある。男の王がいるが、邪馬台国と争いをしていると書いています。

面白いことに、学者の中には、邪馬台国九州説を採って狗奴国を熊襲の国に当てる人がいますが、宮崎県内としたり、熊本県内としたりで、決定的なものはないようです。

熊襲を討ったという話は奈良時代に書かれた『古事記』『日本書紀』『風土記』に載っており、十二代景行天皇とその皇子の段に、また十四代仲哀天皇とその后神功皇后の段に出てきます。

私たちになじみの深いのが隼人町妙見の熊襲の穴にまつわる話。景行天皇に命じられて、熊襲を討ちに来た皇子は女性に変装して、熊襲の首領たちが酒盛をしている所にもぐり込み、酔っ払ったところを短刀で刺し殺した。皇子は熊襲からタケルという名をもらいヤマトタケルと名乗ったという。

ではこの話は本当にあったことなのか。学者の説によれば、景行天皇は、弥生時代にいたことになるそうです。この時代は、卑弥呼の時代ですから、天皇がいたはずがないし、天皇制もなかったでしょう。やはり作り話としか言いようがないように思います。

とはいえ、『古事記』『日本書紀』の作者は、熊襲の国をどこ辺りに仮定しているか考えてみるのも面白いと思いませんか。

『古事記』は、九州を筑紫国・豊国・肥国・熊曽国と大雑把に四つに別け、その南端に熊襲国を設定しています。

ところが『日本書紀』は熊襲国およびその周辺をやや具体的に書いているのです。以下、概略を示します。

景行天皇の時代、十二年秋七月、熊襲が叛いて貢物を納めなかった。天皇は熊襲を討つため都を出発。周芳（山口）を経て、九州に入り、豊前国、碩田（大分）国と巡って、十一月に日向国に着いた。高屋宮という仮宮を建て、群臣たちと熊襲を討つ軍議を開いた。

襲国に厚鹿文と迮鹿文と言う熊襲の首領がいた。熊襲には二人の娘がおり、姉を市乾鹿文、妹を市鹿文といった。十三年、ことごとく襲国を平らげた。

さて日向国に来た景行天皇が建てた高屋宮という仮宮は、熊襲を討つための前線基地の役割をする場所のように受け取れます。つまり高屋宮が襲国との境界であり、そこを越すと熊襲たちが住んでいる場所です。

『麑藩名勝考』（一七九五年）には、肝属郡内之浦郷小串村に、高屋山上陵と高屋大明神が在り、そこの天子山という林がこの高屋宮の址だと書かれています。また厚鹿文と迮鹿文、市乾鹿文と市鹿文から大隅半島側の鹿屋を思い起こすところですが、『麑藩名勝考』にも「厚鹿文・迮鹿文ハ蓋シ今ノ鹿屋郷ニ因ミシ名ニアラムヤ」とあります。

景行天皇が熊襲を討った後の帰路を見ると、子湯県・夷守・諸県・熊県・葦北・火国の八代県と巡っています。

これらは宮崎南部から熊本南部の地名と一致します。まるで鹿児島県側は、意識して避けたように、景行天皇が通っていません。裏を反せば、そこら辺りが、熊襲の国の領域に当たることになるでしょうか。ただ景行天皇の記事では、熊襲の住む国名を「襲国」と表記しているのが要注意です。『書紀』は、熊県（球磨郡付近か）を熊国に想定しているようにも受け取れますが。

鹿児島湾奥には、畿内型の古墳が見当たりません。それは大和の文化を受け容れなかった人々の存在を思わせます。これは古墳時代のことですが、それ以前に起きた他所からの勢力と在地の有力者との争いが、熊襲を討った話に投影されているのかも知れません。

熊襲討伐は架空の話としても、邪馬台国論争の再燃を機に、南九州の古代史をもう一度見直してみたい気がします。

文責＝藤